図書紹介

土田光男 編著
「わらびっ子」上・下

北宋社（A5判・各三百ページ）

わが友・土田光男が教え子の日記集を上梓した。出版社はあまり名を聞かない小さな社らしいが、体裁はハードカバー、上下二冊、各三百ページの立派な本である。

この春退職した彼は、教師生活の中ほどから退職までの十七年間、ずっと子どもたちに日記を書くことを要求し続けてきたのだが、その間にたまった膨大な日記の中から、魚沼の子どもたちの意識と暮らしぶりをくっきり示した作品をよりすぐり、彼の愉快な評語を添え、「家族」「ともだち」「教室の風景」「日記たいへんだったよ」などのプロットを立てて編集した本である。

一読、幸せな教師生活を送った男だなぁ、というのが最初の感想である。

彼は毎日提出される日記の中から、子どもたちや父母とともに読みあってみたい作品を選んでは「学級通信・わらびっこ」に載せ続けてきた。彼はその十七年間の学級通信を読み返し、本に載せるべき作品を選びながら、一人ひとりの子どもの顔を思い出し、言葉を交わし、ほほえみ、抱きしめ、哄笑し、その後ろにいる親たちと語り合うというううらやむべき作業をしたのである。

さらに本が出来上がると、その本を教え子たちを訪ねて配って歩きながらその先々で歓迎され、さらには最後の教え子の親たちからは出版記念会まで催してもらうという果報まであったという。その事は、彼の出し続けてきた学級通信がいかに父母たちの心をとらえ父母は彼に全幅の信頼をよせて子どもたちを預けてきたのかを示している。

本の帯のコピーに「子どもがまぶしい」とある。まさにこの本の中で躍動する子どもたちの姿は屈託なく素直で快活で光り輝いている。その子たちに語りかける著者の評語もどこまでもあたたかい。

今日の五時間目、先生がいきなり、

「この時間、おこらん」

といいました。私は、そう言っていながらおこるなと思いました。たくまが、わりざんのひっさんがわかりそうだったから、先生が、

「たくまちゃん、もう少しじゃないの」

と言いました。

五時間目がおわって、先生が、

「おこらんがあも、つかれる」

と言いました。（三年・関美里）

「先生、おこったって分かる訳ないでしょ。やさしい方がよく分かると思うよ」と子どもたちに手厳しくやられ、それもそうだなと反省。そしてパフォーマンス。楽しい日記が生まれた。

（本の読者を意識して、このような評語は通信に載せたものに少し手を加えてある）

彼はあとがきで言う。

「子どもたちは、自分で書き綴るだけでなく仲間の文章にも限りなく興味を示すようになる。彼等の文章は、よく家庭や教室で話題になり、笑いを引き起こしたりもした。子どもたちは互いに刺激しあい、それぞれの心情や生活を共有する。それがまた書くことへのエネルギーにもなった。それは、日記の相互作用ともいうべきものであったろうか。こうして日記活動を通してクラスの姿も造られていったようである。」

彼は日記を閉鎖的な教師と子どもの間の私信にしていない。子どもたちは、教師にあてて書いたものでも、同時にそれはクラスの皆への呼び掛け・報告になっていることを意識しながら、集団の中での居心地のよい連帯を楽しんでいる。そういう実践の記録として私はこの書を高く評価する。

「魚沼新報」という地域紙の報道によれば六日町のある書店では二週にわたってこの本がベストセラーのトップだったとか。むべなるかなである。

最近少し怠慢になって、子どもたちに日記を書けと呼び掛けることが少なくなっている自分の実践姿勢を叱責され、励まされる思いで私はこの本を読んだ。

（佐藤守正＝上関小学校）

お知らせ・会員の自費出版

池田一男 著

「新潟県農民運動史（戦前編）」

（A5判・四五九ページ）

戦中に新潟県教員になり、戦後の教育運動に長年尽力されてきた池田一男さんが、退職後二〇年の大半を費やされて、標記の書物を出版しました。

「戦前―明治維新の動乱期から太平洋戦争の敗戦まで―の新潟県における農民騒動・小作争議と農民組合運動等の実態を、事実に基づいてできるだけ具体的に叙述しようとしたもの」です。（吉田）

頒価　五〇〇〇円

申込先　〒九五〇―三三四三

豊栄市上土地亀四九八

TEL.FAX 025-386-3749